

「内政、外交、合戦、一手に里見が掌握し沙汰することこそ正しい道筋です。いまの里見は、合戦となれば在地豪族に助けを求める有様。これではおかしいと、思うのです」

「それで、運河か？」

稲村城に直結する港湾は、水軍をやがては一手掌握する術なのだろう。

「海に暮らす者には、海の暮らしがある。それが在地の衆である」

「その機嫌などに任せては、安房の覇者になれませぬ」

義豊とは、頭がよいのだろう。

よすぎるが故に、義実以来のゆるやかな結束が我慢できないのだ。さりとて義豊の志すことを実践するならば、もう少し後の世に託すのがよい。里見あつての当家であるという自覚が在地に根付いてこそ「一統」だ。もしくは世上が乱れきり、力で屈服するしかない状況にのみ、發揮される考えである。

が、残念ながら安房は表向き、緩やかな関係を構築し互いに支えていける世である。むしろ「一統」の無理強いこそ、徒な戦乱となるだろう。

それで敗れもしたら、すべてを失う。後の世の物笑いの種だ。

「のう、太郎よ」

義通はぼつりと呟いた。

「我らが里見の家でなく、名もない民百姓に生まれていたなら、こんな想いはしなくて済んだかもなあ。童のおりには、一緒の布団にくるまったこともあった。あの頃は素直で可愛かったなあ」

立ち上がるうとした義通は、突如、小さく呻いて、吐血した。

「父上！」

義豊は驚愕して助け起こし、大声で人を呼んだ。動かすことが危険であると看立てられ、義通は稲村城の一室に横となった。

慌てて駆けつける奉行衆のなかには

「よもや大殿を」

と訝しがる者もいた。

義通が病であることは、誰もが初耳である。いや、気取られないよう、必死に堪えていたのかも知れない。他国に知られたら、里見が窮地に立たされると思ったのだろう。

しかし、発覚したからには、もはやこれからのことが肝要であった。

「殿の責務は重うござる。が、奉行衆も在地も皆が里見を支えましょう」

里見実堯の声は優しかった。

しかし、「一統」から遠ざかるもどかしさに、義豊の心は沈んだ

里見義通が病に倒れたという件は、内密にされた。特に真里谷信保には告げられることはなかった。

生き馬の目を抜く戦乱の世。

容易に真実を明け揚げにする危険を、実堯は強く説いた。奉行衆も同じ意見だ。

黙っていても、じきに露呈しよう。

そのときになってからの外交こそ大事。実堯は切々と義豊に語った。

「盟約とは名ばかり、信頼なんてどこにもないようなものじゃ」

「そのとおりでございます」

実堯の表情は峻しい。

義豊とて承知している。

もしも逆の立場なら……。

まず真里谷家へ見舞いを出すだろう。足繁く通いながら、その領内を隈なく調べ上げていくのだ。

そのうえで、果たして次の代も盤石に非ずと判断すれば、里見から真里谷家は更に人を送り込む。行人、道の輩、雲水……これらはすべて、乱波。

内応者を集い随所で調略を行う。

そして、機を見て、やがては軍を用いることとなる。

里見のこの認識は、そっくり真里谷側の認識だ。「一統」以前に課せられた、現実の中の外交

の重さである。夢がまた一歩、遠くかゝる……義
豊は溜息を隠せなかつた。
十
十
十

賢使君(2)

夢酔 藤山